



TITLE:

天命建元の年次に就て : 太祖滿文老檔の一考察

AUTHOR(S):

三田村, 泰助

CITATION:

三田村, 泰助. 天命建元の年次に就て : 太祖滿文老檔の一考察. 東洋史研究 1935, 1(2): 117-133

ISSUE DATE:

1935-12-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/138683>

RIGHT:

天命建元の年次に就て

——太祖滿文老檔の一考察——

三 田 村 泰 助

序

謂ふ所の滿文老檔は、清朝入關前に於て、滿洲人の手にて編纂されたる、最初の歴史書である。

そして更に此書の特長づけるものは、その書が彼等の自國語たる滿洲語を以て誌されて居る事である。

滿洲語の創定には、周知の逸話があつて、常識家の太祖努爾哈齊の前に、學者達が術もなくその融通の利かなさを曝露したと云ふ事が傳へられて居るが、太祖が滿洲語を創らしめた事は畢竟する處、外國語である蒙古語等を用ふる事に滿洲人の感情が堪へられなくなつたのであり、兎も角も、彼等は生々としたものを牽直に傳へ得る様な、自分等の表現法を欲したのである。此様な現象は、所謂民族的な自覺の現はれと謂へる。そして、かくして創られた言語で、兎も角も自己の歴史生活を叙述し、編纂されたものが滿文老檔なのである。此の故に、同書には、多分に、女真人としての彼等の感情・生活形態が盛られて居る事は想像に難くない。處で滿洲族は、その興起以來、政治的發展には目覺しきものがあり、文字創定後半世紀足らずして、遼東に覇を稱へたのであるが、同時に、漢人との接觸の度の高まるにつれて、比例的に彼等の内の女真的なものが影を潜め、殊に、中原文化崇拜家たる太宗皇太極の出現は、此形勢に拍車を掛けて

天聰六年には、官の記録に滿文の外に、公然と漢文を併用する事になつて、此處に創定の際の意圖と相反する現象を呈した。漢字の使用は漢人側の奏請に基いてなされたものであるが、更に此の風潮の赴く處は遂に滿洲人の歴史編纂にも漢人が參劃する事となり、滿洲人本來の歴史感情より、著しく歪められて表現されたであらう事が想像され、遂に「實錄」編纂と云ふ漢文化的表現形式が取つて代るに至つた。以後、例へば康熙・乾隆に至つて、屢々行はれた太祖實錄の改修も、その意圖する處は、女真人的なものを削除して、より中原風なものにする^{と云ふ事に歸する}。此時に至つては滿洲語は高々漢文化を吸収する手段に過ぎなくなつて、夥しい滿漢合璧書の内の多數は、此の範圍を出ないものと思はれる。かく考へて見れば、滿文老檔は滿洲人が自己の表現手段で自己の姿を畫いた、唯一の記録の集成であると稱しても過言ではあるまい。

處で滿洲人の本來の生活形態は如何なる種類のものではあつたか。

東夷考略に據ると、女真民族の中、努爾哈齊の種族は、「耕紉を事とし、居處食飲華風あり」とし「俗、射を善くし馳獵す。飢渴に耐へ、詢を忍びて盜を好む。巖壁を上下する事飛ぶが如し。女直に於いて最強を稱ふ」とある。之に依ると滿洲部族は兎も角も中原文化を受け容れる素地のある、女真民族中の優秀部族である事を知る。然し乍ら、一般的文化水準より見れば、矢張り極めて原始的な粗野な生活者であり、素朴な感情の所有者である事に間違はない。

李民葵^(李朝光海君時代の人)の建州聞見錄^註には、明の萬曆四十七八年頃の滿洲人の生活狀態が描寫されて居るが、その住居の條には、

窩舍之制。覆以女瓦。柱皆挿地。門必向南。四壁築東西。南面皆闢大窻戶。四壁下皆設長坑。絕無遮隔。主僕男女混處其中。卒胡之家。蓋草覆土。而制則一樣。無官府郡邑之制。

とあり、更に續けて、

聞胡中衣服極貴。部落男女殆無以掩體。近日則連有搶掠。是以服著頗得鮮好。

と叙して居る。以つて生活の粗野さ加減が窺へるであらう。また、

親舊相見者。必抱腰接面。雖男女間亦然。嫁娶則不擇族類。父死而子妻其母云々。

と記してゐるが、禮儀の國に育つた李民寧は、その風俗の異様さ、又道念の極めて低きを面り見て、孔孟教へる所の夷狄禽獸の感を新にしたであらう。そして、「胡中只蒙書を知る。凡そ文簿は皆蒙字を以つて記す」と記されて居るが、此が支那風に做つて、「後金國」と號し「天命」と建元してより四年目の有様なのである。滿文老檔は、かゝる民族の手になつたものである。

漢文太祖實錄を翻げば、その誇張されたる支那風の表現は、壯重なる文體と多彩なる漢字面と相俟つて、讀者をして凡そ實際から遊離した映像を抱かしめるであらうし、稚拙單調な表現法で、且たど／＼しい行文で綴られた滿文老檔を讀む事と比ぶれば、實相の把握に根本的の差がある事に注意すべきであらう。滿洲語は彼等の日常生活に織り込まれた謂はゞいきのかゝつた詞なのである。實錄からは盛京の黃臺朱壁の樓閣に住む旗人の生活を聯想させるし、老檔からは草むす黒^へ禿^と阿喇^{あら}の薄汚い滿洲族の生活を想起する功德はある。而も、彼も是も實は滿洲人の生活の一面であり、凡そ十年の歲月が呈した所の變化なのである。

近時、清太祖實錄の異本の數種が刊行されたが、此等の諸本を年代的に考察し系統づける事には、やがて此等の實錄が、「史料」として如何なる價值を負へるものと云ふ事の闡明が、考慮されて居る。然しその事には、尙「歴史書」としての實錄の立場が考慮されねばならぬ。新に實錄が纂修される事は同時に、既修の實錄が「史料」としての地位に移る事になるので、この事は實錄が一般的歴史書である爲に負ふ運命なのであるが、その場合、後來の實錄が既修の實錄に對し、何れ程の史實を加へ、又削除訂正したかを考察する事に依つて、その實錄の編纂の立場が考へられ、「當時」

の關心が明かにされる。滿文老檔及老檔と實錄との關係も此の立場から見らるべきであり、老檔と呼ばれるものから實錄の形式へ移行した場合、如何なる手續がなされたか、問題であらう。從來此の研究が疎かにされた傾きがあり、それは大部分滿洲語理解の不充分と云ふ、技術上の理由にも因るが、方法論的には、史實の究明に實錄を所謂根本史料となし、老檔がその場合に幾くの新史實を供給し、實錄の缺を補ひ得るか、と云ふ立場からのみ觀察された所故もある。近人金梁の譯出した「滿文老檔秘錄」は、この傾向の典型を示すもので、高々秘められたる事實を曝露すると云ふ漫然たる興味が取捨の規準をなして居る。然し滿文老檔は滿洲人の手になれる最初の歴史書である以上は、此立場は、逆に實錄が編纂された時、その形式を取る爲に、老檔に如何なる種の史實を加へ、又訂正削除したか、檢討されねばならぬ。「後金國」「天命」と云ふ建國建元の事象は、滿洲族の民族的發展の途に於る、一の標識をなすもので、彼等がかかるものへの關心は、實錄編纂の精神と通ずるものがある。而して、此建國建元の問題の究明は此の史實を取扱へる滿文老檔と實錄との相違を闡明し、延いては此等を構成する歴史的世界への考察にも關係して來るのである。

註 稻葉博士「光海君時代の滿鮮關係」中の「李民奐の柵中日錄」參照、此の中に此の書の内容を詳しく説明してゐられる。

清の太祖努爾哈齊が、明に叛いて、國號を「後金國」と稱し、「天命」と建元したのは、明の萬曆四十四年丙辰の歲（西紀一六一六年）の事とするのが通説である。

處で、此年次は清朝官撰の記錄に由來して居り、實際は、果して此歳に行はれたか否かに就いては疑はしいので、此事は、既に市村、桑原、稻葉諸先生も説かれて居る所である。^註然し、從來、建元の年次を積極的に決定し得る様な史料が、發見されなかつた爲に、未解決の儘に放置されて居た。處が、畏友田川孝三學士がその著「光海君時代に於る毛文

龍と朝鮮との關係」に於て、問題の史料が、光海君日記中に存する事を指摘された事に依つて、之が解決の端緒を得た譯であり、僕の立論も實は、此史料から出發するので、此點は深く同學士に感謝せねばならぬ。

扨て、建國建元の事に關して、先づ當の清朝側の記録を見ると、清太祖實錄（武皇帝實錄本に據る）に、

丙辰歲正月朔申。八固山諸王率衆臣。聚于殿前排班。太祖陞殿。諸王臣皆跪。八臣出班進御前跪呈表章。太祖侍臣阿東蝦・厄兒得溺榜議接表。厄兒得溺立于太祖左。宣表頌爲列國沾恩明皇帝。建元天命。（下略）

とある。桑原先生は、此記事に就て、「太祖實錄に、たゞ帝を稱し元を建てしことのみを記して、國號の事を記さざるは故意か偶然か疎漏といふべし」と述べられて、「金」と云ふ國號はこの時、同時に建てられしものならんと説かれた。

今、少しく此事に關する、當時滿洲の相手國である明、朝鮮側の史料を見るに、先づ皇明實錄（京師圖書館本以下同本に従ふ）萬曆四十七年六月庚午の條には、

禮科給事中开詩教題。逆酋僭號。乞急遣經略以彰神武。稱奴酋陷我城堡以來。目中已無中國。近如朝鮮咨報所云。輒敢建國改元。稱朕云々。

とある。此記事には建國改元が行はれた事のみを記して、その稱呼には觸れて居ないが、王在晉の三朝遼事實錄 萬曆四十七年五月の條に「朝鮮の咨報に依る」として、

奴酋僭號後金國汗。建元天命。指中國爲南朝云々。

と誌して居る。此等の記事に依つて、明廷が建國建元の事實を最初に知つたのは朝鮮からの情報に依據して居る事が分る。而して、明廷が直接當の滿洲から認知したのは、明實錄の記載に従ふと、翌萬曆四十八年の事らしく、即ち、神宗實錄の同年六月戊申の條に、經略熊廷弼の上奏を掲げ、

經略熊廷弼奏。奴賊招降榜文之一紙內。稱後金國汗。自稱曰朕。皆僭號云々。

と見えて居る。尙此の榜文は、宋朝靖難の例を引き、天運既に「明」を去つた事を説いて招降を勧めて居るもので、「後金國」の名稱と共に、自らを曾つての金國に擬して居る態度が充分に窺へるのである。果然、此の建國建元の事實は明廷の耳目を聳たしめたものと見え、勦奴議撮に、

在昔阿骨打年號天會。今亦牽附妄稱天命。此其志不在小云々。

と論じて居る。勦奴議撮の跋の言を信すれば、此の論の議されたのは、恐らく、薩爾滸戰に於る大敗の直後を受けて、明廷の驚愕その極に達した時の様に思はれる。

然し、何れにしても明廷は、此の事實を朝鮮の咨報に依り知つたのであるが、然らば朝鮮は如何にして此事實を知つたのであらうか。光海君日記（太白山本）己未年（萬曆四十七年）四月九日の條に、

時奴酋。送鄭應井等。又遣人致書。稱以天命二年後金國汗諭朝鮮國王。枚數七宗惱恨。歸怨中朝。且求助。已約以通和息兵。胡差至滿浦越邊。結草幕以處。王令過江入城款待贈物。虜使之至我境自此始矣。

とあつて、此の記事は凡ての事情を物語り盡して餘ない事を讀者は了解するであらう。

實に、後金國成立後最初の鮮滿交渉なのである。處で光海君日記には、後金國汗よりの來文は掲載されて居ず、唯大要のみ誌されて居る。即ち、「枚數七宗惱恨。歸怨中朝。且求助。已約以通和息兵。」とあるのが夫である。

従つて史實の精確を期する爲には、此の來文を中心として考察を進めねばならぬ。更に來文を検討する事に依つて老檔、實錄の問題に觸れようとの意圖なのである。

註 市村博士、東洋協會調查部學術報告第一冊、桑原博士、東洋史教授資料、稻葉博士、清朝全史上卷。

國書手交に關する清側の史料を見ると、滿文老檔、太祖實錄何れも此の事を記載して居る。

先づ、滿文老檔(乾隆重鈔 本以下同)の記載様式を見ると太祖老檔己未年三月の條に、

tere nikan tooha de dafi jhe solho i sunja minggan tooha be dahabufi, gaiha duin hafan, emu tungse
 その 南朝 軍 に 味方して來た朝鮮の 五 千 の 軍 を 從 へ、 領した 四人の官 一人の通事
 uhereme sunja niyalma be sindafi unggime bikhede araha gisun. nikan han de usahata koroho nadan amba
 併せて 五 人 を 釋す、 遣はす 書に 誌した 詞、 南朝 汗に 怨む 苦しむ 七 大
 koro i gisun be gemu bibe arafi. jai buya koro i gisun be geli nonggifi. jai hendme.
 恨 の 詞 を 悉く 書に 誌し次に 小 恨 の 詞 を 又 添へて 次に論じて曰く。

と前書があつて、次に文書の全文を掲げ、その記事の末尾の條に、

ilan biyai orin emu de sunja solho de juwe jušen be adabufi takūraha.
 三 月 二 十 一 日 五人の朝鮮人に 二人の滿洲人を 附して 遣した。

と記して居る。太祖實錄の此の部分に相應する記事は、同實錄天命四年三月二十一日の條に、

令朝鮮降將張應京及官三員通事一人。書七大恨之事。遺書一封。遣二使者。與之俱往。

とあり、同じくその文書を掲げて居る。此處で問題になるのは、漢文實錄所載の文書が朝鮮に手交された國書と果して同一内容のものであるか否か、且老檔所載の文書との關係如何と云ふ事であらう。

諸種の清太祖實錄中最初に編纂されたものは、周知の如く、武皇帝實錄本と謂はれる。此は太宗の崇德元年に上呈されて居るが、その前年天聰九年には、太祖實錄圖が完成されて、現存の「滿洲實錄」は此書を傳へたものと謂はれる。

今西學士の説く所に據れば、滿洲實錄は乾隆の改修を経て固有名詞の譯字面は改められて居るが内容に於ては、武皇帝實錄と毫も異らないとし、兩書並び置かれる史料として居る。元來滿洲實錄・武皇帝實錄は共に滿漢蒙の三體で書かれて居るが、同學士は主として漢文の條を基に論じたのであつて、大體論としては、その妥當性を首肯し得る。然し此の「繪入り實錄」は此の種の官撰の編纂書としては、未曾有の形式であり、且は武皇帝實錄との關係よりしても、新なる立

場から考察されねばならない。處で、肝心の滿洲實錄は從來僕達の手許では漢文の分のみしか窺へなかつたのであるが、近時滿洲國から、滿漢蒙三體が具備されて刊行され、面りその全貌を見得る事になつて、研究上に福音が齎された。

此滿洲實錄の滿文は、和田教授の指示された如く、漢文の部に比して、より原形に近い形が保存されて居るので、例へばかゝる際の比較の目安とされる、「明」の呼稱等も武皇帝實錄では「大明」とあるのが、漢文滿洲實錄には、唯「明」と作り前者が古形である事を示す。處で滿文滿洲實錄には *daiming* とあつて、武皇帝實錄本のそれと同じである。此は一例であるが、又滿洲語の性質上、例へば譯字の變化等は元來有り得ないし、且語彙の乏しい事からも改修は制限されるであらうし、かう云ふ點では原形が割に保存される理由はあるのである。それで上述の如く、武皇帝實錄と滿洲實錄とは略々同じ内容を傳へ、且は、滿洲實錄の滿文が、原形により近いものである故に、僕は、此の滿文滿洲實錄を武皇帝實錄と滿文老檔とを結ぶ楔としようと思ふ。と云ふのは、滿文老檔と漢文實錄とでは比較するよすがもないからである。尙武皇帝實錄の滿文は北平京師圖書館に襲藏されて居るが、僕は未だ見て居ないので、精確を期する立場からは此處にも問題が残されて居る譯である。

今、滿文老檔の國書の文を録し、太祖實錄との異同を示せば、次の如くである。(傍線は兩者の異同を示す)

ere nikan de mini dain deribube turgun be alara. (實錄上の句) julge (實錄「前の」に作る)
かの南朝に對し我が兵を起せし理由を告げん(を省く)昔

aisin (實錄「金國の」に作る) han, monggo han, (實錄「蒙古國の」に作る) ilan duin gurun be genu uhe obume
金(實錄「金國の」に作る)汗・蒙古汗(實錄「蒙古國の」に作る)三四國を悉く一となし

dahabufi banjihabi. tutu banjifi tere inu jalan goidane aniya ambula banjihakubi. terebe bi genu bahahabi.
從へ居たりし者かく在りたるがそれも亦代を長くし年を重ねる事能はらむそのことを我熟知せり

(實錄「も亦知る」に作る) ere dain be bi uliraku farhūn i arahange (實錄「起したる」に作る) waka. ere
此の征戰を吾が悟らるる愚昧の故になしたるには(實錄「起したる」に作る)非ざるなり。

かの南朝 (實錄「大明國」の萬曆汗に作る) mimbe umainaci hokorakū (實錄「日」の欺凌に作る) ofi.
 ere weile be deribube. amba gurun i han be. (實錄「に」に作る) mini dolo daci ehe araki (實錄「惡を爲す」に作る) ehereki
 此の事を起しめたり。大國の汗を (實錄「に」に作る) 我が心原々惡を犯す (實錄「大明」に作る) 汗より我に
 seme gūnina biči. abka endembio. abka minbe ainu urulere bhe. nikan (實錄「大明」に作る) han i dere či minni
 と思ひ居たりとせば天識らずとなるんや。天我を何條是とすべし。南朝 (實錄「大明」に作る) 汗より我に
 dere onco. abka waka be wakalame uru be uruleme. tondo be beidefi tuttu dere. mimbe abka urulehe. nikan
 寬大ならんや。天は非を非とし是を是とし正を斷じ此の如し。我を天是とくだらん南朝
 (實錄「大明國」に作る) be abka wakalah. solho suweni čoocha be nikan (實錄「大明國」に作る) de dafi
 minde čoocha (實錄「軍」の字を挿入す) jhe manggi. bi gūnime (實錄「思へん」に作る) solho i čoocha buyeme jhengge waka.
 我に (實錄「軍」の字を挿入す) 又向ひたるは吾思ふに (實錄「思へん」に作る) 朝鮮の軍欲して來たるには非ず
 nikan (實錄「大明國」に作る) de eterakū. otsu i (實錄「國」の兵を退けたる) を挿入す) karu baili seme
 南朝 (實錄「大明國」に作る) に逆ひ得ず倭の (實錄「國」の兵を退けたる) を挿入す) 報恩とす
 jhebi dere, julge neni (實錄「實錄」を省く) aisin dai ding han de solho (實錄「朝鮮」に作る) joo wei jung gebu-
 來れるなら昔我が (實錄「實錄」を省く) 金大定汗に朝鮮 (實錄「朝鮮」に作る) 趙惟忠と謂
 ngge amban. dehi funčeme hečen be gafi ubasame jhe be. (實錄「に依り」に作る) 我が金 (實錄「此の二字を省く」) men i
 くる大臣四十餘城を以て叛て來れるを (實錄「に依り」に作る) 我が金 (實錄「此の二字を省く」) men i
 dai ding han hentume. nikan i joo hoisung ioo kirsung han. meni aisin gurun i (實錄「我國」南朝の
 大定汗論じ南朝の趙徽宗趙欽宗汗に我が金國の
 sung gurun i joo hoisung kirsung ama jui juwe han be (實錄「我國」南朝の
 宋國の趙徽宗欽宗父子二汗をに作る) 征旅せし時朝鮮汗は (實錄「朝鮮國」の
 wang (實錄「雙方」に作る) de dahakū. tondo gurun seme alime gafiakū bederebube sere. teie
 王に作る) 雙方 (實錄「雙方」に作る) に味方せず公正の國とす納めしに退けたる
 be gūnifi muse juwe gurun daci ehe akū bhe seme. sini čoocha gafi jhe amba aije hafan juwan niyalma
 を退けし我二國原より隙あり非ずとす爾の軍を率ゐたる大士の官十人

(ambā ajigen juwan hafan) be weihun jafafi. solho han (solho wang) simbe gūnime asarahabi.
 (實錄「大小十官」に作る) を 生 擒して後朝鮮汗 (實錄「朝鮮王」に作る) 爾を 思ひ留めさせたるなる
te erei dube be solho han (實錄「王」に作る) si sa, abkai wejje ai hacin i gurun akū. ambā gurun i ʕanggi
 今此の始終を朝鮮汗 (實錄「王」に作る) 爾識れ 天の下 如何様の國なからん、大國のみ獨り
banjinbio. ajige gurun be gemu akū obuŋbio, ere ambā gurun i nikan (daining) han be. abkai emu
 存せんや。小國を擧げて無となすか、かの大國の南朝 (實錄「大明」に作る) 汗を 天と一なる
šajin i banjinbi dere seme gūniha bihe, ere nikan (daining) han abkai šajin be gūwalyafi, mujakū
 法を以て在り と思ひ居たるもの。この南朝 (實錄「大明」に作る) 汗 天の法を違へ 甚しめ
murime fudarame gurun be jobobumbi kai, tere be solho han (solho i wang) sini sarkū ai bi,
 横逆を 極め 國を 害ひたり。それを朝鮮汗たる (實錄「朝鮮の王」に作る) 汝の何ぞ關知せ
bi donji. nikan han. solho gurun de. meni gurun de (daining gurun i han. manju. suweni solho
 事あらんや、我聞ならん。南朝汗 朝鮮國 及 我が國に對し (實錄「大明國の汗 滿洲 爾 朝鮮
gurun de (gemu ini juse be unggiŋ ejen obuki seme hendumbi sere, ere nikan (daining) に作る)
 國「に」に作る) 共に 彼の王子を遣つて主となんと 謂くや かの南朝 (實錄「大明」に作る)
han muse juwe gurun be gidašaha, fusiñilaha ambula kai, solho han (solho wang) sini dolo muse
 汗 我 兩國を 欺き 輕んずる事 甚しと謂ふべし、朝鮮汗 (實錄「朝鮮王」に作る) 汝の心 我が
juwe gurun dači umai ehe akū bihe, te bičibe, muse juwe gurun emu hebe oi nikan (daining gurun)
 兩國 原より一の隙にあらんや。今と雖も、我が兩國は 盟を結びて 南朝 (實錄「大明國」に作る)
de ushaki sembio. bi engeri nikan (daining) de dame wajiba, nikan (daining) či hokorakū
 に怨を晴らすと謂ふか、一度 南朝 (實錄「大明」に作る) に味方したる上は、南朝 (實錄「大明」に作る) ち 背かず
sembio. sini gisun be donjiŋi seme. (bihe unggiŋe) lian biyai orin emu de sunja solho de juwe
 謂ふか、爾の言を聽かん と (實錄「書を遣せり」を挿入す) 三月二十一日 五人の朝鮮人に二人の
juŋen be adabufi takūraha, (實錄に最後)
 滿洲人を附して 送りたり。(の句を省く)

右によれば、老檔と實錄とは、大體に於て、一致すると云ふ事に、何よりも先づ注目せねばならぬ。此事は、二者が同

一の史料の上に立つて居る事を示すものであらう。そして、異つて居る箇所を検討すれば、自ら兩者の特色が出る譯である。それで重な箇所を二三調べると。

先づ固有名詞では、老檔に *nikan* とあるのを實録では *daining gurun* に作り、老檔に *solho han* とあるのを後者が *solho gurun i wang* に作つて居る。

nikan は「清文彙」に據れば、元來「漢人」の義であり、普通名詞である。清文彙は清朝の撰述であるが、華夷譯語を見ると、漢人を「泥哈捏麻」で寫してゐる。此は *nikan niyalma* の音寫で *niyalma* は「人」の意であるが、*nikan* は何の意味か分らない。然し之に依つて明代に於ても、女真人が明廷又は明人を *nikan* 又は *nikan gurun* にて稱した事を知る。僕は來文中の *nikan* に「南朝」を宛てたのは、後金國の他の漢文の來文に、「南朝」とあるし、又實録には *daining* と云ふ語が存して、之を區別する必要があると思つたからで、便宜上の譯に過ぎない。尙此の *nikan* に對する女真人の自稱は「*jušen*」の語が存した事は華夷譯語の「女直」の處に「朱先」とある事に依りて知り得る。

兎も角も、實録編纂が行はれる時に至つては、開國の始、粗野な形で育まれて居た國家意識とか民族意識が明確になつて來、同時に明人との對立意識も、中原風な「國家」と云ふ形を通じて具現するので、歴史叙述の際にも彼我の稱呼には抽象的な國家名が要求されるに至つた譯である。太祖老檔に終始して現はれる、*nikan*, *nikan gurun* は實録では *daining gurun* に、*jušen gurun* は *manju gurun* に改められて居る。そして實録に於けるかゝる改訂には、滿洲が明に對し國家として對等の地位を占める事を明確にすると云ふ意圖が見られる。崇徳の初にあつては、清人には明廷が容易に覆没するものと思はれず、却つて朝廷と尊崇し朝貢した宗主國を對等の立場で呼ぶ事に大なる誇を感じたに違ひない。尙 *daining* 大明の稱呼には、更に幾分の敬意と怖れをも感じたと思はれる。尤も大明なる語は「大なる明」でなく、その儘の形が當時の一般的な稱呼として行はれたとすればそれ迄の事である。

實錄に、*aisin han, monggo han* を夫々 *aisin gurun han, monggo gurun han* と *gurun* 「國」の語を挿入して明確にし、*nikan i joo hoitsung* は *nikan i sung gurun i joo hoitsung* と改めて居るのも、皆上述の意圖に基くものである。
 南朝の趙徽宗 *南朝の宋國の趙徽宗*
 次に、老檔に *solho han* とあるのを、實錄に、*solho gurun i wang* に作つて居る。*gurun* 「國」を挿入した事は右に述べたが *han* 「汗」を *wang* 「王」に改めたのは如何なる意味であるか。元來 *han* なる語は華夷譯語に依ると、

「皇帝」の意に用ひられて居るが、滿文老檔には *nikan han, solho han, monggo han* 等とあるのを見れば、此の語はその部族民族の最高の主権者を指すに相違ない。彼等女真族間にあつては、例へば滿文滿洲實錄に據ると、萬曆の初年遼東に於ける女真人の總主権者であつた哈達の王台を *wang han* と呼んでゐる。處でこの *han* 汗を *wang* 王に改めたことには女真人が漢人の影響を思想的に受けたことが認められる。滿文老檔の記載に従ふと、天命年間に於ては、女真人は、明・朝鮮を夫々別個の獨立國として取扱つてゐる。尤もこれは、高々明人の建てゝ居る國、朝鮮人の國と云つた程度の素朴な認識を基調として居る。然し乍ら明と朝鮮とは宗主國と屬國との關係で、朝鮮人の所謂「君臣父子」の關係なのであり、朝鮮は滿洲との交渉に於ても、事毎に此の宗屬關係を強調して止まなかつたのである。清の太宗が初代皇帝としてその帝位を正した後は、明と對等であるの故に、清と朝鮮との間にも、身分、上何等かの規定を設ける必要を感じたものらしく、かくは *han* を改めて *wang* としたのであらう。崇德年間太宗の第二次征鮮の役、所謂丙子虜亂は此の身分規定を朝鮮に強要した處に因が存するのである。*wang* なる語は勿論漢語「王」の移入である。此の語は既に天命の中頃には、滿洲内部にも將來されて居り、老檔に太祖が八子を「王」と爲す記事がある。此に據ると、「王」は夫々八旗の主権者となつて、その旗を統べ、「汗位」はこの八王中より繼承す可きを記して居る。その故に、滿洲國內部に於いても、*han* なる太祖と *wang* たる諸子との關係は方に君臣父子の關係である。此の「王」に比すべき滿洲本來の爵號は貝勒 *beile* であるが、此と併せて「王」なる語が用ひられる事は滿洲族が漸く中原風な表現形式に關心を持つに至つ

た事を示すので、「後金國」成立以後の滿洲族内部の趨勢を現はす。然し乍ら、之を對外關係の上に敷衍して清鮮關係を規定する事は、恐らくは女真人の從來の觀念の外のものであり、こゝにも太祖實錄編纂に於ける、當事者の根本的な態度が見られる。

以上は來文の中の固有名詞に就いて考察したのであるが、文章の構成上注目すべきは、實錄では自國を中心とする叙述法に改めて居る事で、例へば、老檔に「nikan の趙徽宗我が金國と戰ふ時」とあるのを「我軍（金國と言はず）宋の徽宗を征伐する時」と改め、又「明汗朝鮮國我國に對し」を「大明國、滿洲國及汝、朝鮮に對し」とする如きである。此の事は既述の民族的國家意識の高揚が過去の史實を改變せしめる例であり、實錄編纂の基調と成れるものゝ顯現である。更に、老檔所載の文中、文意の不通又は明確を缺いて居る箇處を、實錄の方で訂正して居る事は、上掲文を見れば分るが、此の事は老檔の文が文章としては拙劣であり、完成せる文體でない事に想到せしめるのである。そして實錄の文と對比すれば、滿洲人の文字的なものへの向上の跡が見られる。

以上考察して來た事に依り、實錄所載の來文はかく歪められたものである事を證した。次に老檔所載の文書と朝鮮に手交された文書とに就いて考へるに、前記の如く、光海君日記には、此の文書が缺けて居るが、大東野乘所收の趙慶男の亂中雜錄には此の時の來文と稱するものを載せてゐる。同書は野史ではあるが、比較的信憑し得るものと思ふので、今その文を掲げ、對照に便する爲め太祖實錄所載の文をも併せ録する。（雜錄の文は上段に、實錄の文は下段に掲げる）

（前略）昔大金大元。併吞三吳。意欲獨存。到底其後。無永也。不得其志。此樣之事。我皆詳知。昨犯之事。不是我昏昧之致。乃有犯大國皇王之意。青天豈不鑑察。天何佑我。況我險面。豈大於南朝皇帝險面乎。天至公。是其是非其非。我

先朝大金帝蒙古帝。併三四國。總歸于一。雖如此。亦未得悠久于世。吾亦知之。今動干戈。非吾愚昧。因大明欺凌無禁。故興此兵。吾自來。若有意與大國結怨。寧蒼鑒之。今天之眷顧我者。豈私我而薄之明耶。亦不過是者是是非非。以直斷之。

今料朝鮮助兵南朝。非出於本意。必被南朝救倭之功。微督之甚。故不得已助之也。昔太宗世宗皇帝時。朝鮮趙注罷以四十餘城投之。世宗却之曰。我朝與宋徵欽相戰之時。朝鮮兩國都不助也。是忠厚之國。是以却之。今我逆念兩國自前和好之情。故將朝鮮將帥十餘員。活捉來此。看看國王之情姑留之。而今後之事。專在國王定奪。然後天下何様之國獨存。而盡滅小國之理乎。所謂大國南朝與天地同法。而今違天施謬。屈害天情。諒國王豈不知過也。況南朝要撥他兩箇兒子。我國兩爲主。此南朝期我兩國之甚。今國王或念我兩國。自前無絲毫之怨。因修前好。同恨南朝。或脫我而助南朝。何必復棄之。故奉書以俟國王回音。

とある。亂中雜錄所載のものは、その文體俗語を交へて、洗練された文でなく、朝鮮人が「胡書」と呼ぶに、誠に相應しい態のものである。そして此の文書と滿文老檔所載の文書とを仔細に比較すると、二者が極めて類似せる事が分る。例へば「況我臉面。豈大於南朝皇帝臉面乎」とあるのは、何の意味か分らないが、之を老檔で見ると *nikan han i dere ü nini dere ončoo* とあるに當る。dere は清文彙に「側」「人面」とあり、僕は「側」の意を採つて「南朝の方より我の方に寛大な事があらうか」と譯した。亂中雜錄の方は dere を「人面」と解して「臉面」と譯したものと思はれる。此は一例であるが、此の様な相異が存するのは如何なる譯であるか。李民奐の建州聞見錄に、

胡中只知蒙書。凡文簿皆以蒙字記之。若通書我國時。則先以蒙字起草。後華人譯之以文字。云々

とあるのは、此の間の消息を氷解せしめるものである。「我國」は朝鮮を指し、「通書」は今迄檢討して來た國書を指すも

故祐我而罪大明。爾兵來助大明。吾料其非本心也。乃因爾國有倭難時。大明曾救之。故報答前情。不得不然耳。昔先金大定帝時。有朝鮮官趙惟忠以四十餘城叛附。帝曰。吾征徵欽二帝時。爾朝鮮王不助宋。亦不助金。是中立國也。遂不納。由此觀之。吾二國原無仇隙。今陣擒爾官十員。特念爾王。故留之。繼此以往。結局惟在王矣。且天地間國不一也。豈有使大國獨存。令小國皆沒耶。吾意明朝大國。必奉行天道。今違天背理。欺侮外國。橫逆極矣。王豈不知。又聞大明欲令子侄主我二國。辱人太甚。今王之意以爲吾二國原無隙隙。同仇大明耶。抑以爲既助大明。不忍背之耶。願聞其詳。

のと思はれる。薩爾滸戰に於て、滿洲に據はれた李民奭は此の滿鮮交渉の經過を興京に居て親しく聞見し、自らも交渉の衝に當つたものであるが、此の記事に依ると、朝鮮への國書は滿洲文の草稿を漢人が譯したので、滿洲は開國草創の時分とて、何れも教養低き輩の集りであり、此の様な場合に兩者の意思の疎通を缺くのも無理からぬ事であらう。

以上、永々と來文を中心として考察して來たのであるが、右によつて滿文老檔所載の國書は朝鮮に手交した國書の原文の草稿であり、之に或る意圖の下に改修を加へたものが滿文滿洲實錄所載の分であり、漢文太祖實錄のは滿文實錄の忠實な翻譯であることが分る。此の事に依つて滿文老檔は、その當時の記録を略々原體裁の儘收めて編纂されたもので、甚しく尊重さるべき性質の史料であることが知られるであらう。

更に、以上考察した事に依り、老檔と實錄との間に差異がある事を略々了知し得ると思ふ。そして此が朝鮮に手交された國書であるだけに、滿洲人のかう云つたものに對する關心が、奈邊に存するかと云ふ事が分るのである。此等の事は實は滿文老檔と實錄との編纂の際に於ける態度の根本的な差違なのである。そして此の問題は取りも直さず、歴史叙述が持つ根本的な問題である。其處で當初に意圖した如く、滿文老檔の簡単な考察に移らうと思ふ。

三

滿文老檔を特長づけて居る歴史的世界は、素朴な民族意識を基調とする、主觀主義的な立場で構成されて居る。此は實錄の中原風な國家思想に基く客觀的叙述と對蹠をなすので、例へば薩爾滸戰の記事を見ると、實錄では戰鬪の記事の前に、明軍の陣容に就いての記述が試みられ、明將の姓名・官位・出身地・兵數・滿洲攻略の計劃・行動等に就いて誌して居る。此の事は實錄の形式に於ては、先づ「事實を正確に録する」と言ふ客觀的な立場が採られるので、實錄の序にある如く事實を後世に傳へて、子孫の反省の具に供する爲である。その故に、そこに記された事實は、何よりも先づ

子孫反省の具であり手段であらねばならぬ。薩爾渾戦では清の寡兵よく明の大兵を破つたので、その事實を傳へて後世の子孫に開國の辛苦を反省せしめんとし、その目的を達成する爲には廣く材料を採り、事件を彷彿たらしめ得る事が肝心なのである。そこには事實の獨立性が要請され、此の事の爲にはその事實を叙述する人々の關心とか、又例へば滿漢の民族的反感・戦争に於る敵味方の立場とか云つた様な、その人々との系累を考慮すると云ふ事は影を潜めるのである。老檔に「明」に關する右の記事を缺く事は、老檔に於ても事實を傳へる精神に變りはないけれども、事實の考察を當の相手國たる明に迄及ぼし得る程の能力もなく、或は關心もなかつたのであらうし、又當時の政治情勢上不可能であつたに違ひない。即ち此等の事象には「時」が持つ處の制約性が考へられ、その背後には當時の「現代」が懸つて居るのである。そこには自己の行動を主として叙述しようとする當時の人々の意圖が見られ、その人々の戰勝の歡びを叙べる感情が考へられる。僕の謂ふ老檔の主觀主義の立場とはかゝるものを指すのである。従つてかゝる歴史叙述の立場からは、物語り風な記述が豫想され、當時の生活者の意識感情が直接に織り込まれて表現されるので、例へば老檔に太祖努爾哈齊註①が吳喇の布占泰を討つ記事があつて、太祖は布占泰の不信に怒心頭に發して、自ら馬を進めて吳喇を攻略するのであるが、その記事の中に、明の萬曆帝が一夜に三度夢を見た事が記されて居る。その夢は、一異種族の女子が怒馬に跨り、矛を持つて舞翼すると謂ふのであり、夢覺めて帝が侍臣に問ふた處、その異族の女子は古の女直今の滿洲部の努爾哈齊であり、而も進んで中原を奪ふの兆であるとして、愕然とすると云ふ説話である。此の説話は謂つて見れば、布占泰征略の事實を客觀的に叙述すると云ふ點では、餘り縁のないものであるが、此の説話には「昔」が「今」に顯現すると云ふ點で、明に物語り風な記述が見られ、物語るもの及び物語られて居るものゝ關心する處は、努爾哈齊の中に示されたる自己種族謳歌の感情の顯現といふ事にかゝる。此の説話は同じ女眞民族中の一部族たる海西吳喇族との抗争の際に爲されたのであつて、吳喇族に打克つた事は、やがて古の女直が現在の滿洲族を通じて復活するの謂であらう。即ち滿洲族

こそは古の榮ある女眞族の傳統を負ふ處の選ばれたる種族である、との自負の念が表はれて居るのである。蒙古源流に「昔の滿珠の金汗の族に成長したる英雄太祖」とあるのは、滿洲開國の始めに於ける揚言を誌したのであらうが、又右の事實を裏付けるものと謂へる。そしてかゝる事象には、滿洲族が部族意識から民族意識へと飛躍した姿が見られ、その民族意識の高揚は、本論説く處の汗號を稱するの事實となつたのであるが、他面、此の意識が歴史的なものに思ひを潜め、やがて老檔編纂となつて表はれたものと云ひ得る。此處で注目すべきは、右の老檔及び蒙古源流の説話の關心する處は民族的なものであり、其處には未だ、古の金國を復活すると云ふ様な、中原風な國家的なものへの觀念に迄は到つて居ない事である。此の事は、實は、實錄と老檔との歴史的世界の根本的な違なのである。然らばこの民族意識を性格づけるものは何かと云ふ問題になるが、此の事には尙考究すべき點があり、他日の究明に俟ちたい。然し乍ら、「序」に誌した如き、素朴なる生活者にあつては、その民族意識の基調をなすものは、高々同胞意識であり、隣人意識態のものである事は考へ得る。而もそれは未開族に通有な原始的な素朴な形で示されて居るが、その背後には、一般人間的なものととの類似が見られる。かゝるものの發露は老檔の叙述に於ても見られ、例へば、努爾哈齊が弟及長子の勢力の擡頭するを忌み之を幽殺する記事があるが、此等は自己を凌ぐもの及び自己に陰謀を計るものへの憎惡の感情が、叙述された内容に對する倫理的な内省を遙かに越えて現はれるのであり、その民族の性格が努爾哈齊を通じて顯現したものとも謂へる。逆に謂へば、實は、かゝる種の反省の念が低くて、それ等に制約される事が極度に少い事にもなるのである。何れにしても實錄では、此の種の叙述及説話が影を潜めて居るのは、かゝる一般人間的な個性、或は部族的なもの、民族的なものゝ發露を制約する別な歴史的世界がとつて代つた事を意味する。如上の意味に於て、滿文老檔の歴史的世界は、滿洲族の主觀的傾向に彩られ、然もその感情は何物にも束縛されない彼等の原始的素朴な生活に由來した生々しいまゝのものとして謂へるであらう。

① 太祖滿文老檔癸丑年九月條。

(未完)